

神中しーぶん

平成27年
2月5日

神原中
不定期49号

飛べ!琉球鳥人2015

～劇団O.Z.E公演 出演者募集～

PUSHプロジェクト!!

去る2月4日(水)体育館において、米盛輝武(浦添総合病院)医師等を講師として、体育の時間を活用し二年生を対象に PUSH プロジェクトを実施しました。

PUSHプロジェクトは、胸骨圧迫(心臓マッサージ)だけのもので、心肺蘇生(そせい)の普及を通じて、突然死を救済します。突然死は、いつ、どこでも起ります。誰にでも起こります。ライフサポート協会のホームページ参照)。突然心臓が止まった場合、助かる確率は数%と非常に低く(ウツバイン大坂プロジェクト調べ)、日本では毎年およそ7万人が突然死で亡くなっています。突然、一刻も早く胸外式ショックを用いて、電気ショックをかける必要があります。



右下へ続く

平成二十七年七月四日(土)〜五日(日)の計二日間、パレット市民劇場において、劇団O.Z.E公演「飛べ!琉球鳥人2015」が開催予定です。その出演者募集について、お知らせします。

作品を通して、プロの指導のもと、うちなー口・琉球舞踊・ダンスも習得、また、稽古の中で行う表現教育を通して、世代間を超えたコミュニケーション能力・創造力・自己表現力・協調性を養う。作品を作るにあたり、当時の歴史・文化を学ぶバスツアーを出演者とにも計画し開催する。出演者自らが調査研究すること、

ことで、沖縄の歴史・文化を次世代に継承する。この事業を通して、子どもたちの居場所づくり、将来の夢や目標を見つける喜び、年齢を超えた出演者同士の触れ合いの中で、普段の生活の中では得られない自己発見ができる。以上の様な目的で実施される事業です。

事業内容としては、平成二十七年一月月上旬より出演者募集の告知を行い、二月までを募集期間とする。二月下旬にオーディションを開催、劇団の団員を中心に選考を行い、出演者を決定する。出演者は経験不問、対象は沖縄県民であり、中高生の児童・生徒を中心に子育て世代の父母、定年退職を迎える世代も参加可能。作品は「飛べ!琉球鳥人」ライト兄弟よりも前に、人類で初めて空を飛んだ十八世紀後半の人物、琉球王朝の花火師、安里周當「飛び安里」をモチーフに夢を追いつける姿を描いたストーリー。作品を通して新たな沖縄の歴史文化を学び、

「飛び安里」って!

ライト兄弟が動力飛行を成功させるのは、前回の琉球王朝時代に、空を飛ぶことを夢見て、実際に飛ぶことができたうちなーんちゅがいる。飛び安里と呼ばれる親子は、二代に渡って試行錯誤を重ね、とうとう高津嘉山からの飛行に成功した

初めからやるうとしないより、どれほどまわっている。周當はとうとう空を飛ぶことは叶わなかったが、後に人々は周當の飛ぶことに対する情熱や努力を敬い、誰ともなく周當の事を「飛び安里」と呼ぶようになった。との伝承が残っている。

新しくなった南風原町役場には、南風原の偉人飛び安里が実際に使った翼の二分の一スケールのレプリカが展示されている。骨組みは真竹でできており、羽部分は布が貼られている。とても王朝時代に設計して作られたとは思えないほどの立派な作りになっている。沖繩の偉人の知恵や努力を目の当たりにできる。



子どもたちの居場所づくり、また年齢を超えて協力しあい舞台を作り上げる中で、協調性の養成、自己発見する事業としてこの市民劇を上4演する。(稽古期間)三月〜六月 午後十八時から三時

(募集・申込方法)

那覇市、浦添市、南風原町を中心として県内の小中高へ、また公共施設へ募集概要・募集ポスター・申込用紙を送付。専用申込用紙に記入し、FAX・郵送にて応募する。(裏面参照)

(問合せ先) 劇団O.Z.E(オゼ)
那覇市港町二一六一―琉球新報開発ビル四階 TEL:八六六一―六一一八
FAX:九六三―四三二〇

制作担当・金城理恵
携帯:〇九〇―三七九〇―三一〇八
(応募締め切り)
平成二十七年二月二十八日(土)

安里周當は、琉球王家御用の腕利きの花火師だった。大層裕福だったが、那覇の首里から南風原町に移住し、津嘉山にある高津嘉山から妻に命綱を持たせて何度も飛行を試みる。周當の翼は凧のような作りの簡素なもので、何度も飛行実験に失敗する周當に、周りの人々は「変わり者だ」「飛ぶなんて不可能に決まっている。」「と口々に言った。しかし、それに対する周當は「やってみて失敗したところで、初めからやるうとしないより、どれほどまわっている。周當はとうとう空を飛ぶことは叶わなかったが、後に人々は周當の飛ぶことに対する情熱や努力を敬い、誰ともなく周當の事を「飛び安里」と呼ぶようになった。との伝承が残っている。

AEDの設置は拡がりつつあるが、AEDを用いた心肺蘇生を行えば、救命率の向上が期待できます。PUSHプロジェクトでは、心肺蘇生の重要性を多くの方に学んでもらうことで、突然死の方の救命率向上を目指す。市民によるAEDの使用が認められて10年になり、現在7万人といわれ、増え続けている。学校でも年間数十名の児童生徒が若くして亡くなっています。適切にAEDが使用されたケースは、わずか3.7%に過ぎませんが、最後に、「完璧でなくてもいいので、声かけ、深呼吸、勇気を持ってください」と呼びかけています。

